

サングワチサンニチ(旧暦三月三日)の行事

浜下り由来

昔、おばあさんがいらっしゃったそう。そのおばあさんは、アカマターが男に化け、美しい女の所へ遊びに行き来しているのをいつもみていた。アカマターが白いサージ(手ぬぐい)を被り、カンブーしているのをみて(女性に「あなたの家に来る人は、人間ではないよ。あの人が来たときに、夜、針にウーバーラー(芭蕉糸を入れる竹かご)いっぱい芭蕉糸を針にとおして、その人の頭に突き立てて送って、その人の後を追ってみなさい」と言ったので、そのとおりにすると、このアカマターは洞穴に行っていたそう。そうして洞穴で同じアカマター同士で「俺は人間界で子どもを宿してきたよ」と言うと、別のアカマターが「お前はそう言うが、そんなに人間はばかではない。三月のよもぎ餅を食べ、浜で水浴びをすればその子は全部おとりしてしまうじゃないか」と言うので、この伝えから三月には浜下りして遊びなされるのだそう。

(資料引用については、一部加工修正をしております)

宜志富カメ(明治三十二年生まれ)

これは『恩納村の民話』に採話されている

サングワチサンニチ(旧暦三月三日)にまつわるお話で、同様の民話は県内でも広く知られています。特に女性はサングワチサンニチには「浜下り」をして、手足を海水に浸して不浄を清め、健康を祈願し、潮干狩りなどをして楽しく過ごす行事として知られています。

豊かな海が広がる恩納村でも、サングワチサンニチの日には、たくさんの方が海へ行くことと思います。しかし、各地域の字誌や伝え聞いた話によると、海へ出かける以外にも特色ある様々な事が行われている(行われて

いた)ようですので紹介します。

名嘉真では字誌に「女性が浜に下りて身を清め、神へ祈りを捧げる。ハマウリの晩に女性が自弁当を持ち寄り、公民館で宴を催して楽しく過ごす」とあります。

喜瀬武原字誌では「三月三日にごちそうを重箱に持参して安富祖や熱田の浜で女たちが潮干狩りなどをして一日遊んだが、今は行われていない」とあります。村内で唯一海に面していない喜瀬武原でも、かつてサングワチサンニチの行事が行われていたことがわかり

日で浜遊びと違って、相撲をとったり、潮干狩りをして遊んだのである。」と記されています。厄除けの意味がこめられていると考えられる屋敷周辺への浜の砂まきは今でも行われています。

山田では「昔ヨモギ餅を神仏に供え、重箱にご馳走を詰めて浜にかけ、娘達の節句を祝った。特に子供達ひとりひとりに三月お重が与えられ、近所の子供達同志(原文ママ)で見せ合ったりした。海に行けない場合はジャリを取って来て屋敷内にまいた。これは長物(ナガムン・ハブ)が入って来ないようにとのことである。また、海難事故のあった家庭では浜に降りて香を焚き、供物を添えて供養す

ます。

恩納村誌によると、**瀬良垣**では「サーシバナレ」と呼ばれる小島近くの浜で、区民が海の方に向かって拝し、明治三十年頃まではサーシバナレのそばのクムイ(潮だまり)でササ漁(魚を獲るために、毒性のある植物を水中に投入し、麻痺して浮いてきた魚を獲る漁法。現在は禁止されている)を行い、一日中浜辺で遊んだと言われています。現在は神役と区長が拝みを行っているとのこと。

恩納では同級生や友人同士、女性達がそれぞれ集まり、ソーミンチャンプルーやクファージューシーを食べながら楽しく過ごす日だったようで、サングアチャー(三月遊び)と呼んでいたそうです。

熊本の民俗学者牛島盛光が一九六〇年代に行った**南恩納**の民俗調査では、サングワチサンニチには「よもぎ餅を掲げ、家の位牌に供える。」と記されていますが、現在ではあまり見られない風習となっています。

谷茶でも浜下りをしたそうですが、この日は個々で責任を持つ猪垣(猪から畑を守る垣)から猪が侵入した場合、その猪垣の責任者がムラに罰金を支払う日であったそうです。現在ではこのような罰金制度はなくなりましたが、谷茶には往事をしのぶ猪垣が、まだいく

る」とあります。浜での供養は一部の家庭でまだ行われているようです。

塩屋農村公園は集落内にあり、海辺から離れたところにあります。そこにはかつて「サングワチャーモー」と呼ばれた小山があったそうです。サングワチャーモーと呼ばれていた名前の由来はわかっていませんが、今でもサングワチサンニチには、公園入口に設けられた拝所を区長や書記のみなさんが拝んでいます。

一般的に知られているサングワチサンニチの行事ですが、村内だけでもいろんな事例がありおもしろいですね。(町田)

【参考文献】

- 『恩納村の民話』恩納村教育委員会 (1982年)
- 『沖縄国頭の村落』津波高志著 (1982年)
- 『恩納村誌』仲松弥秀 (1980年)
- 『恩納村の海の恵み』恩納村博物館 (2013年)
- 『沖縄大百科』沖縄タイムス社 (1983年)
- 『いやしの里 名嘉真』恩納村名嘉真区 (2012年)
- 『花と水の里 喜瀬武原字誌』字誌編纂委員会 (2005年)
- 『恩納字誌』字恩納自治会 (2007年)
- 『沖縄における文化変動—本島及び石垣島における事例研究—』牛島盛光『沖縄の社会と習俗』窪徳忠編 (1970年)
- 『恩納村歌集』古波蔵清 (1978年)
- 『年中祭祀』山田字誌編纂委員会



屋敷周辺に浜の砂をまく(仲泊)

つも残っているそうです。
仲泊については『恩納村歌集』(古波蔵清一著 一九七八年発行)に「仲泊では御重のご馳走はなかったが、麦の雑炊をつくって御先祖にお供えし、また屋敷の周囲に浜の砂をまいていた。いまでもその風習が残っている。また三月三日はよく干潮するので、サバニヤテンマ(伝馬船)が通りやすいようにするため、部落民が総出でノージサライ(イノー路浚い)をしたのである。それは干潮時でも舟の出入りができるため十年前まで続いていたが、今はやってない。三月三日は午後は農休



サングワチャーモーでの供物(塩屋)